

大学構内向ケ岡貝塚

渡 辺 直 径 (人類)

今年の1月文化庁から、人類学教室に保管されている弥生式壺形土器を国の重要文化財に指定したい、という申し入れがあった。この土器は明治17年(1884)に、当時大学予備門の生徒で、後の工学部教授有坂紹蔵先生が、向ケ岡貝塚から発見され、後に弥生式土器の名称の因になった、由緒ある標本である。文化庁の係官と談たまたまこの土器の発見地のことに及んだが、実は、向ケ岡貝塚そのものが幻の遺跡となつて、既に久しいのである。

土器の発見から5年後の明治22年(1889)に、当時大学院の学生で、後に人類学教室の初代教授になられた坪井正五郎先生が、「帝国大学の隣地に貝塚の跟跡有り」という報告を東洋学芸雑誌に発表された。この大学隣地の貝塚というのが向ケ岡貝塚のことで、その位置は「僅かに一筋の往来を隔てたる大学の北隣、即ち旧向ケ岡射的場の西の原、根津に臨んだ崖際」とあり、「当今貝の散じて居る所から上野公園を望んだ景」が、ここに転載した先生の筆になるスケッチで示してある。例の壺形土器についても、石版図を入れて、形態文様の詳しい記載がしてあるが、発見の経緯や地点のことは何も触れていない。当時この貝塚は、「地均らしの為日々人夫が往来するので、踏みにじられる事甚しく、將に其の跡を失わんとし」おり、「思ふに此の文が東洋学芸雑誌に載つて、読者諸君の目に触れる頃には、此の貝塚は殆んど知れない様成つて仕舞ふでござりませう。」という状態であった。

当の発見者の有坂先生は、土器発見から40年もたった大正12年(1923)に、はじめて発見の模様を人類学雑誌に、次のように書きのこされている。「向ケ岡と云ふ場所は、大学の裏門の道を矩てた通りの向ひ側で、根津の街を眼下に見る丘であるが、今日では弥生町の街が建つて、遺跡の正確な位置は解りません。其の頃弥生町と云ふ街は無かつた。裏門の筋向ひには陸軍の射的場があつて、其の西北の方に貝塚が根津の裏の高い丘の上にあつた。其の辺は一面の草原で、当時は家など一軒もなく、兎、雉などが居り狐が出た淋しい処でありました。私はこの向ケ岡の射的場へ時折遊びに行きましたが、此のうしろの草原のところ貝塚を見付けました。」「(そこは)風景の極めて良い処で、上野の森や不忍池を望ん



景々望ヲ園公野上リヨ塚貝岡ケ向

でいる、非常に気持ちの良い緑の丘でありました。17年3月1日に坪井、白井両君と知己と成つたその翌日、一緒につれだつて向ケ岡の貝塚に行つて見やうではないかと言ふので、行つて見たところが、其の時もかなり色々な物を掘り得ました。此の日私はふと貝塚の表面に壺の口が貝のなかから出てをるのを見出し、これをなほ抜き出して見ると、この壺が出ました。」「この壺は共同研究の材料として、坪井君の処に預けました。これが弥生町から出たと云ふので、後に弥生式と命名されたのであります。」ここでも、土器の発見地点については、詳しいことを述べておられないし、遺跡の正確な位置すらもはやわからない、と発見者自身が云つておられるのだから、まさに迷宮に入ったのである。

それでも、昭和になつて弥生式土器の研究が盛んになるにつれて、元祖の土器の出土地点を何とかしてつきとめようという努力が、多くの研究者によって重ねられた。昭和31年(1956)には、東京都教育委員会が、例の土器の発見地を都の史蹟に指定したいというので、農学部の構内を数ヶ処試掘したことがあるが、思わしい収穫はなかつた。止むなく東京都は、幻の遺跡を史蹟に指定して、弥生門から出て左に上る坂道が、根津から本郷通りに向う言間通りと合流する地点の農学部側に、由来を記した立札をたてた。教育委員会がこの地点を選んだ根拠は確かめていないが、恐らくさきに引用した坪井先生の「射的場の西の原」という記述と関係がありそうである。その立札は、その後道路拡張工事の際に取り払われ、現在弥生門の方に下る坂道の途中に移されている。また、数年前東京都の町名整理が行われた際、文京区は弥生町の名称を廃止しようとしたところ、この由緒ある町名を変更するとは何事であるかと、地元住民を中心とする猛反対に出会つて、結局弥生町の町名は安泰であつ



明治16年測量同19年製版同20年8月26日出版
 第4号 東京北部(本郷及小石川)
 參謀本部陸軍部測量局 五千分之一



た。そのとき反対運動の旗頭で、数年前停年退官された工学部の太田博太郎教授は、もともと弥生町の住人であるが、向ヶ岡貝塚と壺形土器の出土地点について、綿密な考証を試みられている。

処で、このたび文化庁からの申し入れに関連して、昨年来文学部考古学研究室に、旧浅野邸地区の一部から土器片や貝殻が出土する、という情報が入っていることがわかった。工学部 9 号館つまり総合試験所の建物の東側、崖ぎわの小高くなっているところで、昨年倒れた立木の跡に遺物が露出して、小中学生が崖をよじのぼって来ては、拾い集めているというのである。文化庁からの申し入れを機会に行ってみると、たしかに貝の層があって、土器の破片も散らばっている。しかも、その場所は工学部の建物建設予定地で、4 月には着工する運びになっていることがわかった。そこで、文学部考古学研究室と協同で、その場所の緊急発掘を行ったところ、攪乱されていない貝層の一部や、弥生時代の遺跡によくある溝の遺構などが現われた。また、5 個体分のかかなり大きな土器の破片がひと塊りになってみつかったが、いずれも明治 17 年発見の土器と極めてよく似ており、同型式に属することは疑いない。これらの土器片は、文学部考古学研究室で目下復原中で、来る五月祭に展示するため、学生達が張り切っているそうである。

この新しい発見によって、有坂先生が壺形土器を発見された地点は、この附近である公算が大きくなった。従来、諸家によって推定されていた向ヶ岡貝塚の位置は、上記の東京都が史蹟の立札をたてた辺りと、言問通りを根津の方へ下る坂道の北側の数地点が主である。今回遺跡の発見された地域は、もと水戸藩の下屋敷のあったところで、明治 20 年代には浅野家の邸となり、みだりに立ち入ることができなくなった。この邸内の遺跡がその後探索されなかったのは、こうした事情によるのかもしれない。根津へ下る坂道の北側の丘には、たしかに土器や貝殻の散布している地点があるが、縄文土器が主で弥生土器は極めて稀である、というのが大方の一致した所見である。この丘と旧浅野邸の丘とは、元来一連の丘であったものが、道路や建物建設の際にその間が深く削られて、今では窪地となっている。今回発掘した遺跡の続きが、この削られた丘の上に延びていたことは明らかであるが、今となってはその拡がりを知る由もない。壺形土器の発見された地点としては、少なくとも今までに推定されたどの地点よりも、今回発掘を行った地域の附近が最も有力である。

3 月の末、壺形土器は、同じく人類学教室に保管されている、明治 10 年 (1877) モールス教授が大森貝塚で

発掘された遺物とともに、国の重要文化財に指定されることが決った。同時に、文化庁では今回の向ヶ岡貝塚の新しい発見に強い関心を示して、東京大学からの申請があれば、その地域を国の史蹟に指定するという意向を明らかにしている。わが国の先史学史上記念すべきこの貝塚が、国の史蹟として永久に保存されるならば、これに越したことはないので、関係方面の了解をえて、然るべき措置を総長にお願いした。工学部もこの遺跡を保存することに賛同して、予定されていた建物建設計画の一部を急遽変更して、その地域を国の史蹟指定地域とすることを、総長に具申した。これが実現すれば、コンクリートで覆われた旧浅野邸地区に、僅かな面積ではあるが、辛うじて緑がのこることになるだろう。東大百年史にも書きのこす記事が一つふえることになる。

ここに掲げた地図は、先年亡くなった人類学教室の山内清男講師が苦心して蒐集された、明治以降各版の参謀本部陸地測量部地図のうち、明治 16 年測量、19 年製版の 5 千分の 1 の地図から、本郷附近をやや縮小して転写したものである。有坂先生が壺を発見された前の年の測量であるから、上に引用した坪井、有坂両先生による、向ヶ岡貝塚の位置の記述と比べるのに都合がいい。当時の大学裏門は今日の弥生門に当り、それに続く大学の敷地の境界はほぼ現在のものと一致している。現農学部の南から東にかけての境界も、大体この地図の土塀の線に合致するようである。今回発掘を行った場所は、地図の上に印を入れなかったのでわかりにくいかもしれないが、射的場の北にコの字型の家屋のあるところからすぐ西北方の、崖ぎわに立木の記号が集っている附近である。最近、文学部考古学の佐藤達夫助教授が、丹念に文献を調べ現地を踏査して、「向ヶ岡貝塚はどこか」という短い論考を、雑誌「歴史と人物」の 6 月号に寄稿されている。

序でだが、近く恒例の理学部ビアパーティーが催される植物園には、明治の頃小石川植物園内貝塚とよばれた有名な貝塚がある。明治 10 年 (1877) のモールス教授による大森貝塚の発掘が刺戟となって、理学部生物学科ではにわかには貝塚熱が盛んになった。植物園構内の貝塚は、明治 11 年 (1878) に、植物学の矢田部良吉教授によって発見されたもので、同年 12 月モールス先生も加わって発掘が行われた。貝塚の位置は、例年ビアパーティーの開かれる本館西側の草地と大温室との間の、道路で狭まれた芝生のところである。今でも注意して探せば、縄文土器の破片や、縄文人が盛んに採集し、その後東京湾から姿を消した、ハイガイの殻などを拾うことができるだろう。